

社会意識研究の方法論的諸課題

—社会学的反省のために—

山 崎 達 彦

I

社会的現実、経済的なものであれ、政治的なものであれ、法律的なものであれ、およそ社会諸科学の対象とされるものであるかぎり、主観的かつ客観的に構成されているということは、紛れもない事実である。しかしながら、その主観的な過程と客観的な過程とが日常的な生活において必ずしも一致するとはかぎらないということも、やはり同様に確かなところである。

じっさい、ひとびとは、こんにち、客観的にはかつてと比べものにならないほど広範で密接な相互行為を通じて社会的現実を構成していながら、主観的にはこのような社会的現実を「わがこと」として実感しえず、単に「よそごと」としてしか思えない場合が、けっして少なくない。たとえば、いわゆる「政治的無関心」とか、いわゆる「私生活主義」などがわが国においてしばしば指摘されるわけであるが、これらも、いちおうその端的な事例として受け止められてよいものである。のみならず、この種の事例は、こんにち、枚挙にいとまがないほどなのである。

総じて、社会的現実における主観的な過程と客観的な過程とのずれは、「近代社会の逆説」であるといっても過言でない。したがって、いかなる社会諸

科学も、それぞれの固有の主題を中心にすえているとはいえ、その対象とするところが近代社会の諸相であるかぎり、そのような逆説を不問に付すことはできないはずである。じじつ、これは、社会学においても当初から問い続けられてきたものにほかならない。もとより、このことは、社会学の根本問題が〈個人と社会〉の問題に求められる以上、やはり当然でなければならない。わけても、社会意識研究は、社会意識の基本的な性格のゆえに、いうところの近代社会の逆説によって常に真価を問われているといえよう。

II

社会学がこれまできわめて多様に展開されてきたことは、そのあらゆる分野においてひとしく指摘できる学史的な事実である。この原因が、おおむね、社会学そのものの性格のあいまいさ¹⁾と無縁でないということも、おそらく容易に理解されるところであろう。そして、このことは、さしあたり社会意識研究においても、けっして例外でない。

ところで、社会意識の問題は、内容上、ひとり社会学に局限されなければならないわけでもなければ、そのように局限されうるはずのものでもない²⁾。けれども、社会意識研究が、これまでのところ、おもに、ほかならぬ社会学の諸分野の一つをなすものとして認知されてきているということも、もとより確かである³⁾。しかしながら、この「認知」の理由は、いまだ必ずしも一定していない。

それにつけても、社会意識の問題は、社会学における他分野のいずれのテーマと比べてもかなり特異なもののようにおもわれる。じっさい、それが、当今の社会学においては多分に社会心理学とオーヴァー・ラップするいわば刃境的な分野の問題として位置づけられている場合が少なくないもの⁴⁾、かつては「多数の学者によって社会学の中心問題として扱われ」たことがあるばかりでなく、「極端な場合には社会意識が社会そのものと考えられ、社会学が社会意識の学たる観を呈するにいたった」(新明正道, 1947) こともあるほどなのである。たとえば、このような様相は、一般に、Durkheim の社会

学 (Durkheim, É., 1893, 1895, 1897) およびその系譜上のもの (Lery-Bruhl, L., 1900; Bougle, C., 1922) にとどまらず, 19世紀末葉から20世紀初頭にかけての心理 (学) 主義的な社会学 (Giddings, F. H., 1896; Ellwood, C. A., 1912; McDougall, W., 1920) においても看取されたものである⁵⁾。

もとより, その「極端な」動向はやがて衰微したけれども, このことは, 社会意識研究そのものの社会学的な意義が全面的に否定されたことを物語るのではなく, 単にそれ相当に限定されたことを意味するだけである。じじつ, 特に Durkheim の社会意識の概念⁶⁾のごときは, あるいは「社会意識」の用語そのままに⁷⁾, あるいはこれに代る用語を介して⁸⁾, その後も繰り返し再構成の対象とされながら命脈を保っていたものなのである。しかも, 社会意識の問題が, 20世紀も20年代から30年代にかけて, 別途に Marx のイデオロギー論 (Marx, K., 1857) の系譜を通じてもクローズ・アップされるようになったことは⁹⁾, 周知のとおりである。その結果, 社会学における個別の社会意識研究の多くのものが, いろいろな意味で対照的な二つの社会意識の概念に基づいて, すなわち, あるものは Durkheim の社会意識の概念に通底する形で, あるものは Marx の社会意識の概念に準拠する形で, いわば二元的に展開されるにいたったといっても過言でない¹⁰⁾。

ひるがえって, このような意味における二元的な状況は, 社会意識の問題をめぐって, 40年代以降についても少なからず指摘できるけれども, これが, 第2次世界大戦後になると, その頃までのアメリカ社会学および社会心理学の発展, 特に後者のそれによって一変したかのごとき様相を呈したものである。たとえば, この変化は, Merton が, 彼のいわゆる「知識社会学」を「ヨーロッパ種」と呼ぶ一方, 「世論とマス・コミュニケーションの研究」を「アメリカ種」と名づけて, これらを対照的に特徴づけたことにも示唆されていたところである (Merton, R. K., 1957)。なぜならば, 社会意識研究における従来の二元的な状況は, 実質上, 彼が「ヨーロッパ種」と呼んだ「知識社会学」にかかわるものとして一括され, 他方の「アメリカ種」と対置されることになったも同然であるからである。いいかえれば, さきの二元論的な構図は, 「アメリカ種」と対置されるかぎりでの「ヨーロッパ種」についてのもの

のとして把握し直されて、いわば新規の二元論的な構図に組み込まれたわけである。しかも、この場合の「アメリカ種」の内実は、その後の社会意識研究の推移に関するかぎり、「世論とマス・コミュニケーションの研究」をも含めて、さらに広く社会心理学的研究として概括されてよいほどのものであったのである。

くわえて、この間に展開された「ヨーロッパ種」が、社会意識研究としては、もっぱら Marx のイデオロギー論の系譜上のものに限られるようになった反面、Durkheim の社会意識の概念は、一見、この分野における表舞台から大きく後退したものである¹¹⁾。そして、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」との対置的な関係も、特にこのような状況が顕著になった50年代以降、しばしマルクス主義的社会意識論の展開とアメリカ社会心理学の導入とのそれとしての色彩を濃厚にしたわけである。ちなみに、このような構図は、特にほかならぬ日本の社会意識研究において、きわめて典型的に看取されたものである。

いずれにもせよ、社会意識の問題は、これまでの推移のなかで、社会学においてほぼ社会心理学とオーヴァーラップする辺境的な分野（特殊社会学）に限定的に位置づけられるようになったばかりでない。すなわち、それは、さらに、その他の特殊社会学の諸分野に拡散的に「吸収」されるか¹²⁾、あるいは一般社会学の重要な問題群を構成するものとして発展的に「解消」される方向において¹³⁾、実質的にはなお社会学の全般に及んでいるということも、けっして見落されてはなるまい。要するに、社会意識の問題は、ひとり社会学に限っても、現状としては多岐にわたって錯綜した状況にあるわけである。したがって、このような問題状況は、結局のところ、社会意識研究が社会学における存在事由そのものの問い直しにも通じるほどの方法論的な反省を当面の課題として迫られているということを告げるものであろう。

III

社会意識が社会学において問題になるのはどのような場合か。社会意識は

社会学のどこで問題になるのか。なぜ社会意識はほかならぬ社会学において問題になるのか。社会学において問題になる社会意識とはなにか。社会意識は社会学においてどのように問題になるのか——。

社会意識研究は、社会学において、いまさらのようにこれらの問いを突きつけられているも同然という現状にある。したがって、その反面の課題としての方法論的な反省も、とりあえず最も基本的な諸前提にかかわるところに向けられなければなるまい。とすれば、社会意識研究の社会学的諸系譜の認定とか、社会学における社会意識研究の位置の確定とか、社会意識研究の社会学的意義の確認とか、社会意識研究における始原的な概念ともいべき社会学的「社会意識」概念の定義とか、さらに社会意識研究の社会学的視座の設定などの作業のいずれも、これまでのところ、ほとんど放置されているか、あるいは着手されても未了のままであるということが、さしあたり想起されてよいであろう。

ところで、私は、本稿において、社会意識研究の社会的諸系譜ならびに社会学における社会意識研究の位置については、ごく概略的ながら若干の論及を試みたので、紙幅の関係上、その詳細な検討を別の機会にゆだねて、以下ではさしあたり他の三つの論点を取り上げることにしたい。

まず社会意識研究の社会学的意義についてであるが、これは、当然のことながら、もともと社会学観のいかに応じてさまざまに受け止められるであろう。たとえば、社会意識研究は、前述のように、かつて「社会学が社会意識の学たる観を呈するにいたった」ほど過大にその社会学的意義を認められたことがあるのも、学史的に確かな事実である。そして、このことは、あらためて繰り返すまでもなく、当時の社会学において有力であった一方のDurkheimの社会学観や他方の心理(学)主義的な社会学観に照応した状況にほかならなかつただけに、この状況も、その後の社会学観の変遷にもなって、表面的にはほどなく下火になったものである。もとより、社会意識研究の社会学的意義が、このような推移によって全く見失われてしまったわけではないけれども、特に第2次世界大戦後において、直接的にはあまり顧慮されなくなったということは、やはり全体的な動向として否定されえないと

ころである。じっさい、この動向は、マルクス主義的社会意識研究の展開についてばかりでなく、アメリカ社会心理学の導入についても指摘されなければならない。けだし、マルクス主義の社会学観が極端にあいまいであるとともに、社会学と社会心理学との関係がそれぞれの学問観の多様性によって増幅されて画然としない以上、いずれも当然のなりゆきといえよう¹⁴⁾。かくして、社会学における社会意識研究が、その急務とされる社会学的意義の確認に当って、あらためて社会学観のいかんという問いに直面させられているということだけは、すでに明らかなはずである。

次に、社会意識研究にとって始原的な社会学的概念としての「社会意識」(social consciousness) についてであるが、この概念は、従来ことさら多義的であったものである。じじつ、このことは、たとえば、高田保馬がつとにみずから「社会意識」概念の定義に着手した折りに予め「6項ニ亘リテ9箇ノ社会意識ノ観念」(高田、1915) を分類して批判的検討の俎上に載せざるをえなかったことから知られるばかりでない。すなわち、社会意識が、あるいは「集合表象」と同義のものとして把握されたり¹⁵⁾、あるいは「イデオロギー」と「社会心理」から成るものとして指摘されたり¹⁶⁾、あるいは「集合意識」、「エートス」、「イデオロギー」および「社会心理」などの諸形態をとるものとして「説明」されたりするもの¹⁷⁾、帰するところ、やはり「社会意識」概念の多義性によるのである。要するに、「単一の用語がさまざまな概念を表わすのに使われ、逆に同一の概念がさまざまな用語で表わされる」(Merton, R. K., 1957) という状況は、ほかならぬ「社会意識」概念の場合にも依然として当てはまるわけである。しかも、「社会意識」概念の多義性は、「社会的」(social) ならびに「意識」(consciousness) という二つの言葉のいずれもが元来けっして一義的に用いられていないために、用語的にもそのぶんだけ助長されてきたようにおもわれる。

一方の「社会的」という言葉についていえば、その意味の限定 (definition) が、とりわけ社会学における社会意識研究にとっては、「社会意識」概念の定義にあたって先決事項でなければなるまい。確かに、たとえば Durkheim の「社会意識」概念における「社会的」の意味が第一義的に一定の諸個人に対

する「外在的拘束性」をさすものとして限定されていたということは、周知のとおりである。にもかかわらず、反面、むしろ一定の諸個人の「共通性」のほうがその概念に関していわば対抗的に強調された場合のあることも、同様に紛れのない事実なのである。また、心理（学）主義的社会学はもっぱら社会に対する心理（学）的な解釈を企図していたところから、その「社会意識」概念における「社会的」の意味も、そのような解釈によってさまざまに稀薄化されて一様ではなかったものである。けれども、それはどちらかといえば個人間の「相互性」をさすものとして限定されていたという見方が、いちおう成り立つにちがいない。さらに、Marx のイデオロギー論の系譜上の「社会意識」概念における「社会的」の意味は、もともと、いわゆる「存在被制約性」にかかわる「存在」の社会性をさすにとどまって、多分に同義反復の恐れなしとしなかつただけに、論理的にはそれ以上の限定を要請されていたも同然であつたはずである。しかるに、この要請がほとんど顧慮されなかつたかのように、その概念における「社会的」の意味は、そのような限定についての一致を得られず、このかぎりにおいて久しく莫然としたままであつたといつても過言でないのである。いずれにもせよ、社会意識はまさしく社会的な意識にはかならないという「自明」の事柄が再確認されてみれば、社会的なるものとはなにかというすぐれて一般社会学的な問題が、社会意識研究において、終始一貫その核心にかかわるものとして等閑に付されえないことも、あらためて知られるわけである。そして、このような認識が社会学における「社会意識」概念の定義のために不可欠であるということは、もはや多言を要さないであろう。

他方の「意識」という言葉についていえば、これは、「社会意識」概念に関するかぎり、「社会的」という言葉とも比較にならないほど大雑把に用いられてきたものである。じっさい、たとえば、社会心 (social mind) とか社会的行動パターン (social behavior pattern) などが社会意識と同義に扱われたばかりでなく、さらに社会心理 (social psychology) が社会意識の諸形態の一つとして位置づけられるということさえも、従来の社会意識研究においては、けっして珍しくない。もとより、このような用語上の混乱が「意識」概念の

多義性によることもさることながら、「意識」という言葉がその場合に社会学的な理由も定かでないままに採用されてきたという点こそは、最も重大な問題点であろう。したがって、それが結果的に従来どおり慣用されることになるにせよ、その点の考察も「社会意識」概念の定義のためには放置されるべきでなかったということが、とりわけ銘記されなければならない。

要するに、「社会意識」概念の多義性は、社会学における社会意識研究に関するかぎり、全体としても、あるいは「社会的」ならびに「意識」という二つの言葉のそれぞれについても、かなり早くから顕著であって、場合によっては「社会意識」概念そのものが否定されかねないような根底からの検討を必要としていたわけである。しかしながら、この種の検討はおろか、「社会意識」概念の定義さえ、第2次世界大戦以降しばらくの間、少なくとも新規には試みられることがなかったというのが、実情なのである¹⁸⁾。しかも、「社会意識」概念が、その結果として、久しく旧来の多義性を露呈したままなおざりにされた反面、その多義性は、この間、屋上屋を架されずに済んだという見方も、けっして成り立たないわけではない。それだけに、「社会意識」概念の定義が、久しぶりに、見田宗介をはじめとして（見田、1968）、わが国における社会学者（宮島喬、1983、田中義久、1978、栗原彬、1982）によって「新規」に提示されるようになったことは¹⁹⁾、きわめて注目されるところである。わけでも、見田は、「社会意識とは、『ある社会集団の成員に共有されている意識』である」と定義したうえで、みずから「形式的な定義としてはこれで過不足ない」とまで断定したほどである。なお、彼は、さらに「この形式的な定義を「もう少し内容的に展開」して、「社会意識とは、さまざまな階級・階層・民族・世代その他の社会集団が、それぞれの存在諸条件に規定されつつ形成し、それぞれの存在諸条件を維持し、あるいは変革するための力として作用するものとしての、精神的な諸過程と諸形象である」という定義をも提示したものである。

かくして、「社会意識」概念は、このような最近の試みを通じて、いよいよ社会学的に一義的に構成されるようになったのか、それとも、かえって従来の多義性を増幅されたにすぎないのかをひとまず問いただされたうえで、あ

らためてその定義のいかんを根底的に検討される必要がある²⁰⁾。そして、この検討が、「社会的」なるものとはなにかというすぐれて「一般社会学」的な問題にとどまらず、いわば「意識」概念の社会学的な処遇の問題にもふれるものでなければならないことは、すでにこれまでの論述によって示唆されているとおりである。

最後に、社会意識研究の社会学的視座の設定についてであるが、これは、およそ社会意識研究がほかならぬ社会学において展開されるかぎり、いわば不可欠の前提でなければならない。じっさい、かつての社会意識研究は、Durkheim の社会学およびその系譜上においても、あるいは心理(学)主義的な社会学においても、それぞれに特有の社会学的視座のもとに展開されていたものである。ところが、このような状況は、その後、Marx のイデオロギー論が社会意識研究における方法論的な立場として広く受け入れられるに及んで、大きくその様相を変えるようになったということも、周知のとおりである。確かに、Marx のイデオロギー論の立場は、「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、むしろ逆に人間の社会的存在が彼らの意識を規定する」(Marx, K., 1859) という命題に明示されているように、いわば外在的に意識を社会的存在との関連において考察しようとするものであるところから、これも一種の社会学的視座にはほかならないという見方は、けっして不可能でない。じじつ、たとえば Mannheim の知識社会学の主張のごときは、Marx のイデオロギー概念に対する批判を含むにもせよ²¹⁾、基本的には、やはり Marx のイデオロギー論の立場が社会学的視座として受け止められた結果であるといっても、けっして過言でない。けれども、Marx のイデオロギー論の立場がつねに社会学的視座として受け止められなければならないという必然的な理由は、もとより全くない。とすれば、いかなる社会意識研究も、一般に、Marx のイデオロギー論の立場の採用のいかんにかかわらず、社会学において展開されるかぎり、いうところの社会学的視座の設定ということを不問に付しえないわけである。しかるに、この課題は、従来、全くといってよいほどなおざりにされてきたのである。なお、いわば学籍不明の実証的な調査研究が社会学においてほかならぬ社会意識の問題をめぐる跡を絶た

ないのも、けっしてこのことと無縁ではあるまい。

IV

私は、以上において、社会学における社会意識研究の問題状況の特殊性を指摘したうえで、そのような問題状況に対する根底的な方法論的反省のための基本的な諸課題を提示する一方、ごく概略的ながらこれらの諸課題をめぐるそれぞれの意義に論及してきたつもりである。いずれの課題の検討もあらためて取り組まれるべき急務であるということだけは、もはや明らかであろう。

けれども、これらの検討がそれほど急がなければならないものであるとしても、そのために必要な前提的な作業がなおざりにされてはなるまい。この前提的な作業とは、私見によれば、社会的現実そのものに対する一定の見方（見地）、ひいてはこれに基づく一定のアプローチの確認という作業である。私は、結論を先取りしていえば、社会的現実に対する行為的な見方（見地）、ひいてはこれに基づく行為的アプローチが社会学における社会意識研究の場合にも最も採用に値するものとして確認されるべきであるということをも主張しておきたい。

じっさい、いずれの社会諸科学も、およそ社会的現実を学問的な対象とするものとして、それぞれに固有の方法論的な視座を設定するのに先立ち、明示的にであれ黙示的にであれ、暫定的に社会的現実そのものについての何らかの全体像を前提にすえているにちがいない。しかも、社会的現実が主観的かつ客観的に構成されている以上、その全体像も、社会的現実の主観的な過程と客観的な過程とを相即的に包括したものでなければならない。けだし、両過程は、単に並列的なものではなく、いわば相互媒介的に社会的現実を構成しているからである。

しかるに、社会的現実の全体像は、一般的に、主観的な過程もしくは客観的な過程のいずれかに偏向して結ばれている場合がきわめて多いのである。これは、結局のところ、社会的現実における両過程が相即的に把握されてい

ないためである。したがって、社会諸科学の第一歩は、社会的現実そのものを相互媒介的に構成する主観的な過程と客観的な過程の相即的な把握にふさわしい見方（見地）の選択、ひいてはそれに基づくアプローチの選択のいかんにかかっているといってもけっして過言でないであろう。そして、社会的現実がもともと行為的現実にはかならないという行為的な見方（見地）、ひいてはこれに基づく行為的アプローチこそは、さしずめそのようなものとして選択されなければならない。じじつ、社会的現実の主観的な過程と客観的な過程が相互媒介的に構成されているのも、まさしく諸個人の行為そのものにおいてなのである。

それゆえ、このような行為的な見方（見地）、ひいてはこれに基づく行為的アプローチは、広く社会諸科学を通じて、ことのほかその意義が大きいといえよう。特に社会学の場合は、それが、つとに Weber によって本格的に採用されたことを受けて（Weber, M., 1921）、たとえば Parsons や Schutz によって独自の展開を試みられたばかりでなく（Parsons, T., 1937; Schutz, A., 1932）、これらの系譜とは別途にも多様に採用されてきたものである²²⁾。ところが、社会意識研究におけるこれまでの実情は、一般的には、必ずしもそのようなものでなかったのである。しかも、これは、けっして理由のないことでない。なぜならば、社会意識研究は、従来、わずかに心理（学）主義的な社会学に属するものを除けば、Durkheim の社会学の系譜上にあるものにせよ、Marx のイデオロギー論の系譜上にあるものにせよ、いずれも、もっぱら社会意識の客観的な「社会」性の把握を強調するあまり、その主観的な「社会」性の把握を軽視したこともあいまって、社会的現実に対する行為的な見方（見地）、ひいてはこれに基づく行為的アプローチとはなじまない方向に展開されることになったからである。かくして、いうところの行為的な見方（見地）、ひいては行為的アプローチの採用が社会意識研究においても本来的に要請されているということは、やはり、あらためて確認されなければならないわけである。けだし、私が社会学における社会意識研究をめぐる提示した方法論な諸課題も、既述のとおり、このことの確認という前提的な作業のうえに取り組みられるべきものであるからである。

注

- 1) 社会学そのものの性格のあいまいさということは、19世紀末葉以来、折りにふれて取り上げられてきたものである。けれども、〈個人と社会〉の問題が社会学の根本問題として広く社会学の関心の焦点をなしてきている以上、社会学観の多様性ということも、いたずらに誇張されてはなるまい。とはいえ、社会学がとりわけその分析の焦点をめぐってあいまいであったということは、やはり紛れもない事実なのである。
- 2) たとえば、法学における法意識の研究とか、政治学における政治意識の研究とか、宗教学における宗教意識の研究なども、広義の社会意識の問題を扱っているといっても過言ではない。
- 3) もとより、社会意識の問題が、社会学において、単にその一分野を構成しているばかりでなく、全般にまたがっているということは、おおむね後述のとおりである。なお、この点については、山崎(1977)をも参照されたい。
- 4) ちなみに、社会学における社会意識研究が「社会心理学」と呼称されるのも、それほど珍しいことではない。
- 5) けれども、この様相が、Durkheimの社会学およびその系譜上のものにおける場合と、心理(学)主義的な社会学における場合とでは、その内実を著しく異にしていたということも、けっして看過されてはなるまい。すなわち、社会意識の問題は、前者においてその客観的な側面を強調されたのに対して、後者においてはむしろその主観的な側面を重視されたのである。じっさい、Durkheimの社会学主義も、社会意識の問題に関するかぎり、なによりもまず、このような文脈において受け止められるべきであろう。
- 6) Durkheimの社会意識の概念は、多くの場合、「集合意識」(conscience collective)や「集合表象」(représentation collective)の問題をめぐって取り上げられた。
- 7) Durkheim自身も、きわめて稀にはあるが、「社会意識」(conscience social)の用語を使っている場合がある(Durkheim, E., 1924)。
- 8) たとえば、その最も代表的な事例は、Parsonsの社会学の場合であろう(Parsons, T., 1937; 1951; 1954)。彼は、社会学を社会体系の統合に関する科学として再構成するに当って、実質的にはDurkheimの社会意識の概念に依拠しながら、全く「社会意識」の用語を使わずに、「価値」とか「規範」とか「役割」などの用語を駆使したものである。じっさい、現代社会学の基礎的な諸概念としての価値や規範や役割などは、Durkheim的な意味における社会意識の諸形態にほかならないのである。
- 9) この契機は、社会学の場合、主としてMannheimによって与えられたとい

っても過言ではないであろう (Mannheim, K., 1929)。

- 10) ちなみに、これらの両概念のうち、前者が、もっぱら社会学的な関心のもとに彫琢されて、「外在的拘束性」をその本質的な特徴とするものとして定義された概念であるのに対して、後者は、もともと必ずしもそのような関心とは直接的なかわりなく、もっと広範なパースペクティブに基づいて、「存在被制約性」をその本質的な特徴とする概念として把握されるものである。なお、その反面、これらがある一定の社会 (集団ないし階級) を構成するとみなされる人びとによって共有されている (可能性のある) 意識をおもな対象とする概念であるところに認められる共通点も、けっして看過されてはならない。
- 11) けれども、この場合にも留意されるべきことは、要するに、Durkheim の社会意識の概念が、(社会的) 価値の問題をめぐって、装いも新たに一般社会学における中心的な位置を占めるようになったも同然であるという事実である。この事実が Parsons や Merton などの試みを通じて容易に看取されるものであるということは、あらためて指摘するまでもあるまい (Parsons, T., 1951, 1960; Merton, R. K., 1957)。
- 12) このことは、たとえば、家族意識が家族社会学の問題として、農民意識が農村社会学の問題として、労働意識が労働社会学 (ひいては産業社会学) の問題として取り上げられるところからも知られよう。
- 13) このことは、たとえば、社会意識の問題が、「価値 (意識)」の問題とか、「規範 (意識)」の問題とか、あるいは「役割 (期待)」の問題などという形態において、いわば一般社会学的に把握し直されているという事実によっても明らかであろう。
- 14) なお、わが国における社会意識研究の場合は、この点に関しても、事情がいささか複雑であるばかりでなく、かなり独特である (Yamagishi, T. & Brinton, M. C., 1980)。
- 15) たとえば、Durkheim (1924) を参照されたい。
- 16) このような指摘は、一般に、マルクス主義的な社会意識研究において看取されるものである。
- 17) たとえば、庄司興吉 (1975) および宮島喬 (1983) を参照されたい。
- 18) のみならず、たとえば「社会意識の廃語化」さえ、この間には主張されたこともあるほどなのである。
- 19) もとより、このことは、わが国の社会学における社会意識研究の「新規」な展開を告げるものであったといつてよい (山崎, 1980)。
- 20) その場合、特に高田保馬がつとに社会意識の社会学的な概念をめぐって試みた分類整理との照合的な検討こそは、最も重要な作業でなければなるまい。
- 21) Marx のイデオロギー論は、Mannheim によれば、その特殊的なイデオロギー概念にわざわざいされて偏狭であるために、この概念を普遍化することによ

って「知識社会学」として再構成されなければならないというわけである。

- 22) ちなみに、Martindale が社会学における主要な理論的潮流の一つとして指摘した「社会行動主義」は、私が本稿において「社会的現実に対する行為的な見方(見地)、ひいてはこれに基づく行為的アプローチ」と呼んだものに相当するが(Martindale, D., 1960)、彼も、その「社会行動主義」の支流として、Weber の社会的行為論の系譜のほかに、各種の複数行動論(pluralistic behaviorism) やシンボル性相互行為(symbolic interactionism) などの諸系譜にも論及していたものである。なお、この点については、さらに新明(1974)をも参照されたい。

文 献

- 1) Bouglé, C. 1922, Leçon de sociologie sur l'évolution des valeurs. 平山高次訳, 1943, 価値の進化, 桜井書店。
- 2) Durkheim, É., 1893, De la division du travail social. 田原音和訳, 1971, 社会分業論, 青木書店。
- 3) Durkheim, É., 1895, Les règles de la méthode sociologique. 宮島喬訳, 1978, 社会学的方法の規準, 岩波書店。
- 4) Durkheim, É., 1924, Sociologie et philosophie 山田吉彦訳, 1952, 社会学と哲学, 創元社。
- 5) Elwood, C. A., 1912, Sociology in its Psychological Aspects,
- 6) Giddings, F. H., 1896, Principles of Sociology, The McMillan Press.
- 7) 栗原彬, 1982, 管理社会と民衆理性, 新曜社。
- 8) Lévy-Bruhl, L., 1900, La morale et la science des mœurs. 勝谷在登訳, 19, 道德社会学, 東学社。
- 9) Mannheim, K., 1929, Ideologie und Utopie. 高橋徹, 徳永恂訳, 1971, イデオロギーとユートピア(世界の名著, 第56巻所収), 中央公論社。
- 10) Martindale, D., 1960, The Nature and Types of Sociological Theory, Houghton Mifflin Co.
- 11) Marx, K. und Engels, F., 1847, Die Deutsche Ideologie. 真下真一訳, 1963, ドイツ・イデオロギー(マルクス・エンゲルス全集, 第3巻所収), 大月書店; 広松渉編訳, 1974, ドイツ・イデオロギー第1, 第1篇, 河出書房新社。
- 12) Marx, K., 1857, Einleitung zur Kritik der politischen Ökonomie. 岡崎次郎訳, 「経済学批判」への序説(マルクス・エンゲルス全集, 第13巻所収), 大月書店。
- 13) McDougall, W., 1920. The Group Mind, Cambridge University Press.
- 14) Merton, R. K., 1957, Social Theory and Social Structure, rev. ed. 森東

- 吾ほか訳, 1961, 社会理論と社会構造, みすず書房。
- 15) 見田宗介, 1966, 価値意識の理論, 弘文堂。
 - 16) 見田宗介, 1968, 社会意識論 (綿貫譲治・松原治郎編, 社会学研究入門, 所収), 東京大学出版会。
 - 17) 見田宗介, 1979, 現代社会の社会意識, 弘文堂。
 - 18) 宮島喬, 1983, 現代社会意識論, 日本評論社。
 - 19) Parsons, T., 1937, *The Structure of Social Action*, The Free Press.
 - 20) Parsons, T., 1951, *The Social System*, 佐藤勉訳, 1974, 社会体系論, 青木書店。
 - 21) Parsons, T., 1954, *Essays in Sociological Theory*, rev. ed. The Free Press.
 - 22) Parsons, T., 1960, "Durkheim's Contribution to the Theory of Integration of Social Systems", Wolff, K. H. ed. *Émile Durkheim, 1858-1957*, Ohio State University Press.
 - 23) 新明正道, 1947, 社会意識概論 (国際社会科学協会編, 社会科学講座, 第4巻所収), 二見書房。
 - 24) 新明正道, 1974, 社会学における行為理論, 恒星社厚生閣。
 - 25) 庄司興向, 1975, 現代日本社会科学史序説, 法政大学出版会。
 - 26) Schutz, A., 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Springer.
 - 27) 高田保馬, 1915, 社会意識トハ何ゾヤ, 国民経済雑誌, 第18巻第5号。
 - 28) 高田保馬, 1919, 社会学原理, 岩波書店。
 - 29) 田中義久, 1978, 社会意識の理論, 勁草書房。
 - 30) Weber, M., 1921, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Mohr.
 - 31) Yamagishi T. & Brinton, M. C., 1980, *Sociology in Japan and Schakai-ishikiron*, *The American Sociologist*, Vol. 15.
 - 32) 山崎達彦, 1977, 社会意識研究の性格と展開, 社会学評論, 第28巻第2号。
 - 33) 山崎達彦, 1980, 日本社会学における社会意識研究の理論的潮流, アルテス・リベラレス, 第27号。

(筆者 岩手大学人文社会科学部教授)